
オース&なのは リリカル大戦2012

(0w0)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーズ&nbsp;なのは リリカル大戦2012

【Nコード】

N4857Y

【作者名】

(owo)

【あらすじ】

ミッドチルダにやって来た映司とアंक。

蘇る謎のグリード。

魔法の世界を舞台にメダル争奪戦が幕を開ける。

プロローグ（前書き）

小説書くの初めてなので不安でいっぱいです。
更新もかなり遅めの予定です。

プロローグ

「……」
とある公園で一人の男がベンチに座りアイスキャンディーを食べている。

眼鏡をかけ、金髪と、顔だけなら優男に見えるがその髪型が合わさり異様な雰囲気醸し出している。

「アंक！」

するとまた別の男が公園に入ってきた。

アंकと呼ばれた男はアイスを食べる手を止めてベンチから立ち上がる。

「どうだった？」

「ただのひったくり、どうってことなかったよ。」

彼の名は火野映司、とにかく困っている人は放っておけず今ひったくりからとられたものを持ち主に返してきたところだ。

ちなみにひったくりはバイクで逃げたが映司はそれに走って追いついた。

「少し見ない間に随分遅くなったな。」

「先輩達にいろいろ教わったからね、ちょっと回り込めば簡単に追いつけたよ。」

アंकは再びアイスを食べようとするが、何かに気づき後ろに振り向く。

「映司、ヤミーだ。」

そう言って3枚の赤、黄、緑のメダルを取り出す。

「これも何か久しぶりだな。」

映司は呟きながらメダルを受け取り、走り出した。

「あんなヤミー居たっけ？」

映司がやってきた場所に居たのはサソリのような姿をしたヤミー。

「まあ、いいや…」

そう言つて映司は腰にオーズドライバーを装着。

そしてタカメダルを左手の指で上に弾き、それを右手でキャッチする。

タカメダルとバツタメダルをドライバーにセットし、続けてトラメダルをセットしそのままドライバーを傾ける。

そして右腰のオースキャナーを手に取り。

「変身：！」

その掛け声とともにオースキャナーでメダルをスキャンした。

「タカ！　トラ！　バツタ！　タ・ト・バ！　タトバ！　タ・ト・バ！」

いくつものメダルのエフェクト共に映司は”仮面ライダーオーズ”へと姿を変えた。

「オーズウウ！」

サソリヤミーはオーズの存在に気づき、襲い掛かる。

「悪いけど、一気に決めさせてもらうぞ。」

だがオーズはサソリヤミーの攻撃を軽く受け流し、トラクローで斬りつける。

そしてそのまま体をひねりバツタレッグで回し蹴りを決め、サソリヤミーを蹴り飛ばす。

起き上ったサソリヤミーは尻尾を伸ばして突き出してきたがタカの目で動きを見切りそれを回避する。

オーズは再びオースキャナーでメダルをスキャンする。

「スキヤニングチャージ！」

バツタレッグが変形し、天高く跳躍する。

すると空中のオーズとサソリヤミーの間に赤、黄、緑の3つのリングが現れる。

オーズはドロップキックの体制をとり、サソリヤミーに向かって急加速。

赤い翼と黄色の爪のエフェクトが現れ、リングを潜っていく。

「セイヤアアアアアアアア！」

オーズの必殺キック、”タトバキック”がサソリヤミーに命中し、サソリヤミーはメダルとなって爆散した。

「終わったか？」

アंकが遅れてやってくる。

「ああ、でもサソリのヤミーなんて今までいなかったよな？」

言いながらアंकに歩み寄るオーズ。

「サソリ…？聞いたこともないな。」

だがその時、

「管理局です！そこから動かないでください！」

「え？」「あ？」

オーズとアंकが声のした方へと振り向くと杖を構えたツインテールの女性が居た。

「えーっと…何か？」

「今さっきここで爆発…が…え…？」

だが喋りながら声は小さくなっていき、杖は下がっていく。

そして…

「ユーノ君…？」

「あ？」

彼女とアंकの眼が合う。

さらに彼女の眼には一筋の涙が流れていた。

「え？あれ？さっきの…」

オーズはアंकと女性を見る。

するとアंकは目を閉じ右手の指を自分の頭に当てる。

「成程な…お前、こいつの仲間か？」

「ユーノ君をどうしたの！？」

再び杖を構えアंकに向ける。

「身体を借りてるだけだ。」

「アंक！とりあえずここはおとなしくした方がいいんじゃない。」

そう言いながら映司は変身を解除する。

「あ、さっきのひったくりの…」

女性の方は映司を見て驚く。

「君、名前は？俺は火野映司。」

「アंकだ。」

2人で名乗る映司とアंक。

「私は…高町なのは。」

「じゃあ、なのはちゃん、詳しい話はするからとりあえず杖はしまつてくれる？」

その後、映司とアंकはなのはに管理局へ連れて行かれた。

第1話（前書き）

速くできたけど次は遅くなるかも…

第1話

「まあ、遠慮せんで座つてな。」

茶髪の女性、八神はやてに取調室に案内される。

「えつとまずは…」

はやてはアंकを一瞥する、がアंकは相変わらずアイスを食べている。

「映司さんはなんでこのミッドチルダに来たか教えてくれへんかな？」

「俺達はメダルを追つて来たんです。」

映司が答えるとアंकが右腕からタカメダルとタカのセルメダルを取り出す。

「メダルなあ…」

はやては2枚のメダルを見つめる。

「その銀色の方がセルメダル、ヤミーやグリードの体を構成してて

…」

「いや、ええよ、ヤミーとグリードの事はある程度解つとるからな。」

「

それを聞いて映司とアंकも少々驚く。

「実はなヤミーとグリードは少し前からこのミッドチルダに突然現れて暴れ出したんや。」

「それで私達は私達で色々調べてたんです。」

はやての言葉に続いて金髪の女性、フェイト・T・ハラウンが取調室に入ってきた。

「その最中にユーノ君が行方不明になつてな。」

はやてが再びアंकを見る。

「それで？返してもらいたいかな？こいつを。」

「そうして貰いたいところだけど…出来ないんですよね？」

フェイトが映司を見ながら言う。

「うん、実はもうこの人の体は限界に近くて…」

映司が深刻な表情で語り出す。

「俺が離れたら…5分…いや3分ともたないだろうな。」

アंकは食べ終えてごみ箱にアイスの棒を投げ捨てる。

「仕方ないね…しばらくはこのまま、映司さんとアंकにヤミーとグリードとの戦いに協力してもらおうって事に…」

「じゃあ…これからよろしくな。」

そういつてはやてがアंकに右手を伸ばす。

がアंकはそれを無視して取調室を出て行ってしまった。

「あ…ごめん、あいつも根は悪い奴じゃないんだけどな。」

「ええよ、気にしてへんから。」

アंकの代わりに映司が頭を下げる。

「えっと、こんなこと言うのもなんだけど、管理局が調べたグリード達のデータって…」

顔を上げて映司がはやて達に尋ねる。

「それなんだけど、記録してた資料を全部盗られてて…すみません。」

「

フエイトが映司に謝る。

「そつかあ…そう言えば、何でユーノ君の身体が限界だって解ったの？」

ふと疑問に思ったことをはやてに言ってみる映司。

そして返答は…

「うん、女の勘やな、私達はユーノ君の事はよく知ってるからな

あ。」

「???」

映司には理解できなかった。

一方部屋の隅でフエイトは顔を少し赤らめていた。

取調室を出て行ったアंकはそのまま屋上に出て寝っ転がっていた。

「…?!?!?!」

しかし、突然起き上り服のポケットに手を突っ込む。

「無い…どっかで落としたか?」

そう言っつて屋上から階段を下りていく。

「あ…」

そこでのなのはとばったり鉢合わせる。

「丁度いい、手伝え。」

「ふえ?何?」

アंकはなのはの手を掴み一旦下の階に下りる。

「こいつの眼鏡をどっかに落とした。」

自分に指さしながらなのはにユーノの眼鏡を失くしたことを告げる。

「アंक…何でユーノ君の眼鏡を…?」

「失くしたことなら謝る。」

「え?あ、いやそうじゃなくて探してくれてるのが以外と言っつか…

その…」

素直にアंकが謝つて来た事に若干惑うなのは。

「さっき失くしたのに気づいてからこいつが探せ^{ユーノ}つてうるさくてな。

」

「そっか…ありがとう。」

笑みがこぼれるなのは。

「…さっさと探せ、誰かに踏みつぶされてもいいなら話は別だがな。

」

アंकは眼鏡を探しに別の階へ早歩きで降りて行った。

「ヤミーとグリードの事は色々聞いたけど…」

「メダルで戦う戦士なんて初めて見ました。」

オレンジ髪のツインテールの少女、ティアナ・ランスターとその相棒スバル・ナカジマがオーストライバーを興味津々に眺める。

「そんなにすごいかな…?」

「すごいですよ！なんかヒーローみたいです！」

なぜか目を輝かせて映司に迫るスバル。

スバルに詰め寄られて若干退く映司。

「そう言えば映司さん、アंकはどうやってユーノ先生と…？」

「それは解らないんだ、あいつは俺より先にこの世界に来て俺が来た時にはもう…」

全然教えてくれないし、と呟く映司。

「気にならないんですか？」

ティアナは気になるらしく映司に質問してくる。

「うん、まあアंकはアंकなりに言いたくない理由があるんだろ
うし…。」

「何というか…」

スバルがぼつりと呟く。

「何？」

「映司さんってアंकの事、信頼してるんですね。」

「まあね。」

少し照れくさそうに頬をかく映司だった。

「ありましたよー！」

赤毛の少年とピンク髪の少女、エリオ・モンディアルとキャロ・ル
ルシエがユーノの眼鏡をフェイトのもとに持っていく。

あの後フェイト達も眼鏡探しを手伝ってくれたおかげで早く発見で
きた。

「ありがとう、後はアंकに…あ。」

フェイトが眼鏡を手に取るとそれを後ろから突然アंकが取り上げ、
ポケットにしまう。

そしてアंकはすぐに何処かへ行こうとするが、

「ねえ、アंक…」

「何だ？」

フェイトがアंकを呼びとめ、アंकは振り向かずにごたえる。

「アंकはユーノの頭の中を読み取れるんだよね？」

「まあな。」

アंकは背を向けたまま返答する。

「じゃあユーノは…私の…」

フェイトは言いかけてエリオとキャロの方を振り向き、ハッと我に返る。

「ごめん、何でもない。」

フェイトがそう言うのとアंकは去って行った。

「フェイトさん…？」

「…」

キャロは不思議そうにフェイトを見つめ、エリオを真剣な表情で何かを考えていた。

「お前も苦労してるんだな…」

再び屋上に戻ってきて、貯水タンクの上に座っていたアंकはふと呟く。

「にやはは…気づかれちゃった？」

すると物陰からなのはが現れる。

「お前も知りたいか？」

「ううん、ユーノ君が元に戻ってからでいいよ。」

「だろうな…。」

するとアंकはタンクから飛び降りなのはの目の前に着地する。

「食うか？」

アंकはアイスクャンディーの2本取り出し、片方をなのはに渡す。

「えっと…いいの？」

「俺の口には合わん。」

そう言っただんクに寄り掛かって座る。

なのはは渡されたアイスクャンディーを口に咥えると…

「む…これ何味？」

「抹茶コーラだとさ。」

「毒味？」

「ああ。」

……

「ぷッ」

思わず笑みがこぼれるのは。

「何が可らしい？」

「うーん、なんだかユーノ君と一緒にいるみたいだなあって。」

……

アंकは別のアイス（梨ミルク味）を食べだす、が一瞬表情が歪む。

「これとそのアイスどこで買ったの？」

「なんか変な感じの店だったね。」

「へ？あ……」

なのはが振り向くと映司が屋上に来ていた。

「アंकが他の味に挑戦してみたって言うから買ったのに。」

「そうなんだ……」

「俺だつてアイスが冷たくて”うまい”ってのは解る、ただ今回は

例外だったがな。」

「……？」

”うまい”の所だけ若干強調されてなのはは一瞬気になったがそれ
もすぐに忘れた。

その直後にヤミー出現のアラームが鳴り響いたからだ。

第1話（後書き）

抹茶コーラと梨ミルク 元ネタ解る人いるだろうか？
感想待ってます。

第2話（前書き）

こんな小説でもお気に入りしている人がいてうれしいです。

第2話

これまでのオーズ&なのは 3つの出来事！

1つ！

映司とアंकがなのは達と共に時空管理局へ連れてこられる。

2つ！

アंकが今使っている体がなのは達の仲間であるユーノ・スクライアだと判明する。

そして3つ！

休憩中にの映司達の耳にヤミー出現を知らせるアラームが届いた！

カウント・ザ・メダル！

今オーズが使えるメダルは？

タカ×2

トラ×1

バッタ×1

ゴリラ×1

シャチ×1

ミッドチルダの街の中、映司とアंकがライドベンダーで並走する。そしてその後をなのは達”スターズ”がついていく。

「こっちだ！」

アंकがハンドルを捻り道を曲がり、映司達もそれに続く。

「うおおお！」

映司達が辿り着いた先では巨大なオトシブミヤミーが街を荒らしていた。

「アंक、メダル。」

「さつさとメダルに両替して来い。」

映司はライドベンダーを操縦しながらオーズドライバーを装着し、アंकからメダルを受け取る。

そしてメダルをドライバーに装填し、オースキャナーでスキャンする。

「変身！」

『タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ！ タトバ！ タ・ト・バ！』

「あいつは俺が何とかするから、皆は他の人をお願い。」

メダジャリバーを取り出しオトシブミヤミーを見据えるオーズ。

「解ったけど… 1人で大丈夫？」

なのはは心配そうに声をかける。

「大丈夫、それに1人じゃないし。」

オーズはアंकを一瞥してから再びメダジャリバーを構える。

そのオーズのしぐさを見てなのは達は頷く。

「じゃあお願いします！」

なのは達はオーズにヤミーを任せ、民間人の救助に向かった。

「よし… はあああ…っ！」

オトシブミヤミーに向かって走っていく。

「セイヤッ！」

メダジャリバーでヤミーの足を斬りつける。

「！？こいつ硬い！」

しかしダメージを与える事はできずメダジャリバーは止まってしまっ

「ギィヤアア！」

オーズの存在に気付いたオトシブミヤミーは巨体を回転させ、オー

ズと向き合っ。

「うわっ」と…」

オトシブミヤミーが身体を回転させただけで、激しい地響きが起こり、体勢を崩してしまっオーズ。

「ガアアアッ！」

その瞬間を見逃さず、足でオーズを踏みつけようとするオトシブミヤミー。

だがオーズは横に跳び、回避する。

「映司！そのヤミー様子が変だぞ！念のためこれ持っとけ！」

アंकが叫び、ゴリラメダルをオーズに投げ渡す。

「サンキュー…うわっ！」

メダルを受け取ったオーズに休む暇なく踏みつけ攻撃を繰り返すオトシブミヤミー。

オーズはライドベンダーに向かって走り出し、セルメダルを投げ入れる。

「グガアアッ！」

次々とオトシブミヤミーの攻撃を避け、ライドベンダーのスイッチを押してバイクモードに変形させ、跳び乗る。

オトシブミヤミーから距離をとり、停車する。

そしてトラメダルを抜き、ゴリラメダルを装填、スキャンする。

『タカ！ ゴリラ！ バッター！』

タカゴリバに変身し、再びメダルをスキャンする。

『スキヤニングチャージ！』

「はあああああ…」

深く構えると同時にオーラングサークルからラインドライブを通してゴリラアームとバッテリーにエネルギーが送られる。

「たあっ！」

オーズはバッテリーで跳び上がり…

「セイヤアアッ！」

3つのリングを潜り右腕を突き出しながらヤミーに向かって突っ込

んでいく。

”タカゴリバパンチ”が炸裂した。

「わっ…!?!」

民間人の救助を終えた瞬間突然鳴り響いた爆音に驚くスバル。

「すごい…ほんとにヤミー倒しちゃうなんて…」

自分達力ならばヤミーを倒すことは十分可能。

しかし、一人である巨大ヤミーを倒してしまった。

ティアナはとんでもない人たちを味方につけたのではないかと思っ
た。

「映司さん！」

すべて片付き、スバルはオーズに向かって駆け寄り、なのはとティ
アナもオーズの元へ歩いていく。

「まだ…」

「え？」

不意にオーズが眩き、足を止めるスバル。

急に足を止めたスバルを不思議そうに見つめるのはとティアナ。

「皆来ちゃだめだ！」

オーズがそう言った瞬間…

黒い棒状の何かがオーズとスバルの間の地面に突き刺さり、地面が
碎ける。

「皆は…!」

「こっちは大丈夫！」

土埃の向こうからなのはの声が聞こえ安堵のため息が漏れるオーズ。
だがそれも一瞬、オーズはすぐに棒状の物体が何かを確認する。

「これって…サソリの尻尾？」

「映司！すぐに離れる！」

「っ！」

オーズはアंकクの声に反射的に跳びのく。

その瞬間、サソリの尻尾は地面から引き抜かれ戻っていく。

「あれは…グリード…？」

オーズは戻って行った尻尾の先に黒い甲殻に覆われたグリードを見た。

土埃は収まる。

スバルはすぐにオーズのそばまで駆け寄る。

「映司さん！大丈夫ですか！？」

声をかけて反応がない、オーズは誰もいない空間をじっと見つめていた。

よく見ればオーズだけではない、アंकも同じ空間を見つめていた。「どうかしたの？」

なのはも何が起きたのかわからずアंकの元へ行き問いかける。

「グリードが居た、さっきまでな。」

アंकはそう言って小さく舌打ちする。

「グリードが…？」

スバルとティアナも映司に同じ質問したらしくグリードが居たということに驚いている。

「でも何で襲ってこなかったんだろ？」

「舐められてるんだよ、お前等は。」

アंकはスバルとティアナを一瞥した後になのはを見て、

「お前もな、自分の敵はオーズだけだと思ってやがる。」

「私達は眼中にないって事？」

アंकは何も言わずヘルメットを被り、ライドベンダーに跨る。

「俺達も帰ろう。」

映司もヘルメットを持ってライドベンダーに向かって歩いていき、なのは達も管理局へと戻って行った。

「やれやれ…さっそくやっこしい事になってんな…」
その時一人の牛乳缶を背負った中年男性が管理局を訪れていた。

第2話（後書き）

次回はあの人登場。

そしてアंकとユーノ関係にも少しふれる予定です。

第3話（前書き）

小説書くのって難しい…思ってる事をつまぐ文にできない

第3話

これまでのオーズ& a m p・なのは 3つの出来事！

1つ！

ヤミーの襲撃を受け、映司達が出動する。

2つ！

映司達は謎の黒いグリッドに遭遇、しかしグリッドはすぐに姿を消す。。

そして3つ！

その頃あの男が、機動六課を訪れていた！

カウント・ザ・メダル！

今オーズが使えるメダルは？

タカ×2

トラ×1

バッタ×1

ゴリラ×1

シヤチ×1

「やっぱり映司さん、すごいなあ…あんな大きなヤミー倒しちゃうなんて！」

隊舎にリポートを作成中、だが興奮を抑えきれないスバル。

「喋って無いで速く書きあげなさい、全く…！」

その隣で作業を続けるティアナ。

「でも…映司さんはどうしてグリードのアंकと手を組んでるんだろ…」

「え？」

しばらく作業を続けていたがふとスバルが呟く。

「2人はただ利害が一致しただけだって言ってたけど…」

スバルは先の戦いでアंकがオーズにメダルを投げ渡すシーンを思い出す。

一瞬だけだがスバルはアंकを見ていた。

アंकは確かに映司を助けようとしていた。

「そりゃ、手を組んでる以上助けるくらいするでしょ。」

ティアナは特に何も思っていないらしい。

「そうなんだけどなんか違う気がする…」

「まあ、そんなに気になるなら本人に聞いてみたら？」

そう言つて椅子から立ち上がるティアナ。

「え！？ティアもう終わったの!？」

「あんと違って私は手と口が一緒に動くのよ。」

「うゝ、少しぐらい手伝つて「駄目。「ごめんなさい。」

スバルはどうもレポートが苦手、どうしても擬音語や擬態語が入ってしまつてティアナや上の人に怒られる。

「あ、そういえば…」

「今度は何？」

思い出したようにスバルが顔を上げる。

「さっきの人誰なんだろう？」

スバルは窓から訓練場を見下ろし、そこにいる先ほどの来訪者を見る。

「フェイトさんが言うには私達が戦ってる間にここにもヤミーが来たらしくて一緒に戦ってくれたつて。」

「へえ…」

「さあ〜て…いつちよ行きますか…!!」

「はい!よろしくお願いします!!」

機動六課の訓練場、そこにはエリオとキャロのライティングの2人、そして、

「伊達さん!気をつけてくださいよ!」

映司は訓練場にいる中年男性に声をかける。

「大丈夫だって、俺もまだまだ現役!いや、一応2人と子どもですし!」あ、そういうことね。」

伊達明、かつて映司と共に戦った仲間、そして彼もまた仮面ライダーである。

ちなみに今映司は伊達本人を心配したのではなくまだ幼いエリオとキャロを心配してる。

「大丈夫です、こつちもやわな鍛え方はしてませんから。」

そう言つて伊達に向かってストライダーを構えるエリオ。

「んじゃ、遠慮なく行かせてもらうからな。」

伊達は1本のベルトを腰に巻きつけ、傍に置いていた牛乳缶から1枚セルメダルを取り出し、左手の指で上に弾く。

落ちてきたセルメダルを伊達は右手でキャッチし、

「変身…!!」

そう呟き腰のベルト、”バーストライバー”にセルメダル装填し、バックルに取り付けられているハンドルを回転させる。

『カポーン』

伊達の体をカプセル状のエネルギーが包み込み、アーマーが装着されていく。

「仮面ライダーバース…異世界に参上!つてね。」

メダルを入れてハンドルを回す。

ミッドにはないが同じようなギミックの物を見たことがあるのはとやてが少し吹き出しそうもなったのは秘密だ。

「?」

フェイトは2人が笑いそうになっている理由が解らなかったが、モニターを表示し、

「それじゃあカウントがゼロになったら模擬戦開始、時間制限は10分、ルールは片方が戦闘不能とみなされるか降参するか、それと10分間伊達さんから逃げきつたらエリオ達

は無条件で勝ち。」

「5」

フェイトが言うと同時に空中にモニターが表示され、カウントが始まる。

「4」

エリオがストラダを握りしめ、キャロはエリオの後ろで詠唱の準備に入る。

「3」

バースはセルメダルを取り出し、

「2」

変身の時と同じように指で弾き、

「1」

それをキャッチする。

「0」

瞬間、エリオはストラダのブレストでバースに突進する。

「Drill arm」

バース後ろに跳びながらはストラダをドリルアームでうまく受け流す。

エリオはそのままの勢い抑えてバースの後ろ滑走する。

しかしバースはキャロとエリオ、正確にはフリードとエリオに挟まれる形になる。

「最初っからそっちが狙いか……」

フリードはすでにブラストフレアの発射態勢に入っており、エリオも再び攻撃準備に入っている。

もしブラストフレアを防がれてもそこにストラーダで追撃するつもりなのだろう。

(この状況ならこれだな…)

バースはセルメダルを装填しハンドルを回す。

「フリード！」

だがせまいとキャロの命令でフリードが火球を放つ。

『Shovel arm』

「おらあつ！」

シヨベルアームを思いっきり振り上げ火球をかき消す。

そしてその隙にエリオが再びストラーダを突き出し、突進してくる。

『Caterpillar leg』

だがバースはキャタピラレッグを装着、左足を軸足にキャタピラで無理矢理体を回転させ、右回し蹴りを後ろにいるエリオに見舞う。

「っ！」

寸でのところでエリオはストラーダを停止させ、回し蹴りを防ぐ。

「一度に使えるメダルは1枚だけじゃないんだぜ…ん？」

突然自分の周りが明るくなったことに気づくバース。

振り向くとすぐそこに巨大な火球、フリードのブラストフレアが迫っていた。

「こつちもそんな単純な手で倒せると思ってませんよ！」

「うおっ！？」

ストラーダのブーストで離脱すると同時にバースを軽く蹴り、その反動でバースはよろける。

「やべ…」

『Cell burst』

巨大な火球に飲み込まれるバース。

「やったかの…かな…？」

キャロはフリードに乗ってエリオの隣に飛んでくる。

「あつつあつつ…」

しかし炎の中からバースが現れる。

「流石に今のはやばかったぜ。」

「バースの手には専用武器”バースバスター”それも通常状態ではなく必殺技を放つために必要なマガジンを銃口に取り付けたセルバーストモード。」

「あの一瞬でやったのか…。」

「うおっ！？居たの？」

映司達のとおりでアイスを食べながら模擬戦を見ていたアंक。

一応最初からいたのだが映司達は模擬戦に夢中で全く気付いていなかった。

「さてと…こつからは俺の番だな…。」

バースバスターを元の形に戻しながら、セルメダルを取り出して装填する。

『Brest cannon』

「もういつちよ！」

『Cell burst』

ブレストキャノンにエネルギーが充填される。

そしてバースが左右のグリップを強く握り狙いを定める。

「はあっ！」

バースが言うと同時にキャロにブーストアップ掛けられたエリオがバースに迫り、

「なんてな」

「え？」

あるうことかバースはブレストキャノンを装備したままストライダーを踏み台にして跳び上がり、そのまま真下に向かってブレストキャノンを放った。

映司もあれだけ重いブレストキャノンをつけたまま跳ぶとは思ってなかったらしく驚いている。

「この数カ月、鍛えたのはお前だけじゃないってわけか…」

「そうみたいだね、でも…」

「のあぁっ!?!」

バーズは着地を考えていなかったらしく頭から落下、犬神家状態になる。

落下した衝撃でバースドライバーが外れ、変身が解ける伊達。

「え〜っと…エリオとキャロの勝ちでいいのかな？」

一応ルール上は戦闘不能になったら負け。

変身が解除されバースドライバーはキャロに拾われる。

エリオもストライダーを杖代わりにして立っている。

フェイトは自分が親バカだと思いつつもそういうルールだからと自分を納得させる。

「この勝負、エリオとキャロの勝ちだね。」

まあ、フェイトがそんなことやってる間になのはが勝者を決めていたが。

「終わった…」

「レポートは終わってないみたいだけどな。」

「ふあい…」

スバルも模擬戦に夢中だったらしく、レポートが全く進んでおらずヴィータに見守られ(?)ながらレポートを続けていた。

六課のメンバーと映司達は休憩上で夕食を取っていた

「何か今日は色々あったね…」

「すみません、無理言っただけ模擬戦までしてもらって…。」

「気にすんなって。」

「スバル、取り過ぎ。」

「え？そうかな？」

「ほら、キャロちゃん頑張った。」

「うう…人参…」

「…」

フェイトは今日一日の出来事を頭の中で整理し、

エリオは伊達に模擬戦に付き合ってもらった礼を言い、

スバルはいつも通り大量に食事を皿に盛り、ティアナに怒られ、映司はキャラコにどうにかして嫌いな人参を食べてもらおうとし、

アंकは一人でアイスを食べていた。

「ああ〜！あたしのアイス！」

「グイータ落ち着け。」

「同じアイスならまた買ってあげるわよ。」

が、アंकが食べていたアイスは元々グイータが狙っていたものらしい。

シグナムとシャルマルが暴れるグイータを押さえつける。

「そんなに食いたきゃ買ってすぐ食うんだっただな？」

「アंक：女の”子”相手にそんなに…」

『ピキ』

「ふん、”ガキ”の事なんか知ったことが。」

『ピキ』

「え〜っとな、2人とも…それグイータの前じゃ禁句やで。」

はやての後ろでグラーファイゼンを構えるグイータ。

「くそ…ユーノが無事ならすぐにも引っぺがしてやるのに…なあ

シャルマルの力ではかできないのか？」

先ほどの強気は言葉使いは無くなり落ち込んだように喋るグイータ。

「それも試してみたけど、魔法の力とメダル力の共存は難しくくて

…」

アंकが付いていないと今のユーノは生きていけず、かといって魔法

での治療を行えばアंकがユーノから弾きだされる。

そのまま治療を続けてもユーノの体力が持たない。

シャルマルはすでにその事を実験済みだった。

「そう言うことだ、諦めるんだな。」

アंकはアイスの棒を捨て、冷凍庫から別のアイスを取り出して階段を上って去って行った。

「蓋ぐらい閉める…ってこれ…」

ヴィータはアंकが空きっぱなしにしていた冷蔵庫を見るとそこにはアंकが先ほど食べていたアイスと同じものが置いてあった。

「もう2本目か…明日の分のアイスは無しか？」

伊達が映司に向かって話しかけてくる。

「いや、さっき食べてたアイスはあいつが自分で買ったやつだから。」

「

「んな、じゃあさっきのは…」

「うん、ヴィータちゃんのアイスじゃないよ。」

「ややこしいことしやがって…」

勝手に勘違いして怒ったのが恥ずかしかったのかヴィータは少し赤くなっていた。

「ってアंकコ金持ってたのか？」

「うん、なんかバイトしてたらしいよ。」

「マジか？」

「えっと、ヴィオラ演奏してたらしいよ？」

(あわねえ…)

「やっぱりここなんだね、鳥だから高いところ好きなの？」

「…」

アंकが屋上でアイスを食べていたらなのはも屋上に上がってきた。

「お前こそ何でここに来る？そんなにこの体の事が気になるか？」

振り向かず屋上から夜景を眺める。

「最初は気になってたけど今はそうじゃないかな…ユーノ君とはよ

くここから街を眺めてたから…」

「だろうな。」

「知ってたの？」

アंकクはなのはの方を向いて右手を出す。

「こいつの記憶はある程度解ってる。」

「ある程度ってどのくらい？」

なのははなぜか恥ずかしそうにアंकクに聞いてくる。

「…知られたくないことでもあるのか？」

「うん…他の人に知られるとちよつと恥ずかしい事とかもあるかな？」

アंकクはセルメダルを出してなのはに歩み寄る。

「今お前に入れたら面白いヤミーができそうだな。」

「え？」

そのままアंकクはなのはに近づいていき…そのまま横を通り過ぎていく。

「まあ、今の俺にはヤミーを作る能力ないがな。」

アंकクがドアノブに手をかけようとした時、

「ねえアंकク！」

なのはに呼び止められるアंकク。

「こいつは…自分の仲間を庇ってグリードに襲われて…俺は偶然その場に居合わせた…。」

「アंकク…？」

アंकクは何も聞かずに1人で喋り出す。

「身体が不完全だったからな…丁度よくこいつが居て助かったよ。」

「？」

アंकクは階段を下りて行ったが、

「今のって…」

なのはは最後のアंकクのセリフに違和感を感じ、呟いた。

第3話（後書き）

アングのバイト…いわゆる中の人ネタって奴です

伊達さん登場…後藤さんはちよつと待っててね。

キャラは確か人参が嫌いだったはず、違ったらゴメンナサイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4857y/>

オース&なのは リリカル大戦2012

2011年11月28日20時48分発行